

# 瀬尾南海展を終えて

切原 勇人

はじめに

「生誕百二十年日本画家瀬尾南海の世界」知られざる鹿児島ゆかりの画家」という企画展を、平成二十六年十二月二十三日から平成二十七年四月五日までの期間開催した。

瀬尾南海の百点ほどの資料を寄贈されてから、十二年が経ち、南海生誕百二十年という記念に併せての企画である。一人の作家の作品をまとめて展示すると、その作家の変遷を紹介することができる。しかし、今回は、表装されていない状態の資料が多く、鹿児島で、ほとんど知られていない画家であったために、記されている書物も少く、不安も大きかった。

そこで、頼りにしたのは、『瀬尾南海画集』であった。その中に、「父（南海）は、人生は全て縁によって結ばれる、と言っていた。」という長男行成氏のことばがある。これが何かのキーワードとなるかもしれない、という期待も持ちながら、調査や計画を進めた。準備を進めていると、思いもかけない情報が得られたり、様々なことが起きた。

ここで、今回の企画展の資料調査や展示にまつわるエピソードなどを、小文に記したいと思う。

## 一章 知られざる瀬尾南海

南海のことについて「大日本書畫名家大鑑 傳記下編」では、次のよ

うに記されている。

名は清一、明治廿七年鹿児島市に生る、狩野探溟の門に学ぶ。東京住。これだけの情報では、内容も少ないので、前述の『瀬尾南海画集』を基に紹介する。

瀬尾南海（本名：清一<sup>きよかず</sup>）は、明治二十七（一八九四）年に大阪府に生まれた。薩摩藩士の祖父鶴汀<sup>かくてい</sup>に、幼い頃から絵を学んだ南海は、小学校に入学するが、「教科書があまりに幼稚だ」と怒る鶴汀により、退学させられ、四書五経、十八史略等の漢籍を鶴汀から学び、学校には通うことはなかったという。

絵画に関して記録が残るのは、南海が九歳の時、内国勸業博覧会が大阪で開催された時のことである。時の東宮（後の大正天皇）の行啓に当たり、美術協会系の団体であった東洋美術奨励会から大阪府知事を経て、会員九十三人の絵画作品が東宮に奉献されたが、その画家の名前と題名の中に、瀬尾鶴汀「日向国霧島図」、瀬尾探清（後の南海）「奔馬の図」がある。

その絵画作品が東宮に奉献された後に、明治天皇の皇女常宮、周宮と富美宮、泰宮の泉布観（大蔵省造幣局迎賓館）御成で、皇女を迎えて、二度にわたり御前揮毫が行われた。一度目（常宮と周宮の時）は、東洋美術奨励会の女流会員十三人による御前揮毫で、「九歳の探清」がいて、馬の絵を描いた。

また、二度目（富美宮と泰宮の時）には、九歳から十三歳までの少年男女会員が、小型色紙に描いたという。なお、四人の皇女のうち一番幼い泰宮は、後に東久邇宮稔彦王妃殿下となり、およそ半世紀後に南海と再会することになる。

明治四十一年（一九〇八）年、南海が十四歳の時、一家で上京すると、当時、活躍していた絵師の狩野探溟（薩摩出身の樋口探月の門弟）の画塾で本格的に絵を学び、大正七（一九一八）年、文部省美術展覧会（文展）に入選するのである。師の探溟からは、後継を強く望まれるが、それを拒み、南海は、次第に画壇から離れていく。

そして、素人の希望者に絵の手ほどきを始め、昭和十五（一九四〇）年には、南海を師と仰ぐ「素仙洞」（素人の仙人の集まり）という会ができる。南海は、絵を描くことの楽しさを、多くの人に味わってほしいと思ひ、全国各地で絵を教える。中には、ダム工事の現場も含まれていた。絵を教えてまわる多忙な生活は、晩年まで続き、教え子は、財界人、実業家、大学教授、住職、菓子屋、主婦、会社員、学生などであったという。このような南海は、画題も技法も幅広く、各流派にわたるのが特徴で、七十五歳で亡くなるが、鹿児島では、ほとんど知られていない。

## 第二章 祖父鶴汀とは

鶴汀は、本名寛左衛門といい、大阪詰め の薩摩藩士であった。絵を描くことに優れ、島津斉彬の絵の相手を務め、西郷隆盛や桐野利秋にも絵の手ほどきをしたと伝えられている。

次の絵は、鶴汀の描いた西郷隆盛であるが、西郷に直接会い、描いたという点が稀少であり、貴重な資料であると思われる。



鶴汀筆「南洲先生真像」卷子

（紙本墨画三四・三×二二六・五）

明治九（一八七六）年

西郷南洲先生真像

明治九年秋先生エ別ル此之像

鶴汀の資料は、これ以外、昭和二十（一九四五）年五月二十五日の東京大空襲によって、すべて失われたといわれる。

鶴汀は、南海にとっては、大きな存在であったと思うが、生まれの詳細は不明で、大正三（一九一四）年他界。南海が二十歳の時であった。

## 第三章 御縁

### 第一節 寄贈

企画展開催に当たり、南海が大切にしていた「御縁」による出来事ではないかと、思われたことを紹介する。

今回の企画展のことを考え始めたのは、十年ぶりに南海資料が寄贈されたことがきっかけであった。

1 平成二十四年六月瀬尾南海筆色紙等二十九点 寄贈受入れ

寄贈者の父は、昭和九年から東京で開業医をし、南海の家も近く、そこへ南海の子どもが入院したことがあり、そのお札に色紙をいただいたりした。

また、その医師の兄が、南海の画塾に通っていたこともあり、正月など機会あるごとに、色紙や掛軸などをいただいたのだという。南海が亡くなると、南海の長男（行成氏）と交流が続いている。

2 平成二十六年三月瀬尾南海筆色紙等四点 寄贈受入れ

前年度の寄贈者が他界され、大事にしていた作品を遺族から、寄贈したいと申出があった。

3 平成二十六年十一月 瀬尾南海筆はがき等六点寄贈受入れ

南海の塾の弟子でもあり、前述の医師の兄宛のはがきなどを企画展に活用してほしいと申出があった。

## 第二節 南海資料を所有する静岡からの情報

企画展開催まで四、五ヶ月という平成二十六年八月から九月にかけて、静岡県の岩邊進氏から、実家に残る、南海の作品に関する連絡があった。そして、すぐに資料の写真が届いた。企画展を始めようとするときに、思いもかけない出会いであった。

岩邊氏の実家（これらの資料のある旧岩邊平吉邸）は、静岡県清水区蒲原にあり、現在、進氏の叔母（父の妹）の岩邊園江氏が居住し、南海の資料も保管・管理している。園江氏は、現在八十九歳になる。岩邊平吉

の長男弥之助は、進氏の叔父（父の兄）で、実業家であった田中光顕氏の秘書を務めていた。

この岩邊邸に昭和二（一九二七）年五月、南海が一ヶ月滞在し、その御礼として南海から「三聖・山水三幅対」等をいただいている。その後、南海は、岩邊邸を何度か訪れたのだという。

岩邊家に残る南海の資料の十三点のうち、六点を企画展に借用した。そのうち、二点を紹介する。

まずは、昭和二年、静岡蒲原の浜小屋と、婆やと一緒に魚を買いに出かけている女の子を描いている。

その幼い女の子は、まだ二歳の園江氏がモデルである。

① 南海筆「初夏之蒲原漁村図」掛幅

絹本・著色 一二四・三×四一

昭和二（一九二七）年（個人蔵）



次は、秀淵という画家が描いた、記録写真のような資料である。

画家秀淵とはどのような人物であったのか、詳細はわかっていない。

② 秀淵筆「南海ほかの似顔絵」掛幅

紙本・墨画・著色 四一・五×五八

昭和二（一九二七）年（個人蔵）



【箱書】

岩邊家客遊秀淵画伯筆 昭和貳年初夏

【蓋の裏書き】

昭和貳年初夏当家ニ瀬尾南海画伯及秀淵画伯二人

客遊除我座敷ニテ写生ヲナシ其ノ時ノ記念画ナリ

中央五十嵐義右へ弥之助 父平吉 左へ長栄寺伊丹覚海 南海画伯

秀淵画伯 其他。（残り二人については記載されていない。）

画面左に、南海が描かれている。また、描いている秀淵も画面に描かれているという興味深い資料である。

当時の様子を園江氏が後で聞いたのだと思うが、なぜか皆、正装で集まり、おもしろい様子であったという。南海三十三歳、平吉五十歳、弥之助二十四歳の時である。そして、南海独身の時の姿である。

第三節 三男行弘氏

瀬尾南海の三男行弘氏家族が、三月二日、三日に来館した。

企画展が開催されたことを喜ばれ、父南海に関するエピソードを聞く機会にもなった。例えば、作品集の写真にただ一人、学生服姿の男性は、行弘氏自身であるとか、写真や作品を見ながらの思い出話であった。行弘氏は、父（南海）の集まりに同席することが多く、写真にも写ったのだという。



平成二十七年三月二日

企画展の展示観覧

写真を見ながら、懐かしそうに家族に説明している行弘氏

行弘氏からこのことを聞くまでは、南海氏の指導に熱心に学んだ学生としか思っていなかった。



平成二十七年三月三日  
祖父南海作品の前でフルートを  
演奏する直子氏

行弘氏家族が来館したもう一つの目的は、行弘氏の二女直子氏の長年の夢「南海作品の前で、フルートの演奏をしたい。」という願いを叶えるためであった。



行弘氏  
↓  
南海  
↓

素仙洞  
明治神宮スケッチ大会  
父南海を囲む集まり  
に加わる行弘氏

そこで、企画展の会場から少し離れた部屋（講座室）に、南海作品を十点展示して展示会場の雰囲気を作り、演奏してもらった。

祖父南海の作品の前で、直子氏は、即興で演奏を繰り広げた。それは、フルートの音色が心地よく、ゆったりとした雰囲気、南海作品と共鳴し、しばらく酔いしれた。

南海に対する直子氏のことばがある。

祖父南海は、私が産まれる前に既に他界していた。南海先生の絵を見た記憶は全くなく、大学生になった頃、叔父の家の応接間の壁に大きな絵が飾ってあり、それが、南海先生の絵との衝撃的な対面であった。それから、ベルギーに移住し、ある年に日本へ帰国した際に、祖父、南海先生の話をお父から少し聞いた。叔父が監修した「南海画集」を持ち帰り、毎日のように眺めては、いつか、南海先生の絵の前で演奏したいと、漠然と夢描いていた。

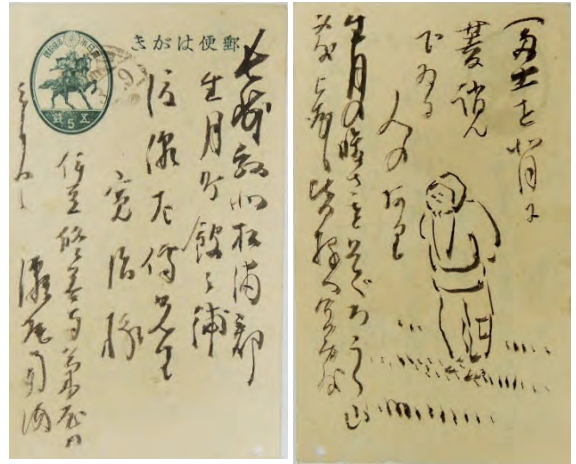
直子氏の夢の叶ったひとときでもあった。

#### 第四節 他館からの情報

##### 1 長崎県平戸市生月島町博物館「島の館」

企画展も後半にさしかかる三月四日、行弘氏家族が来館された次の日に、生月島町博物館の山下伸代氏から電話があった。

生月島の旧家を調べていたところ、瀬尾南海のハガキが数枚見つかった。そこで、「瀬尾南海」とはどのような人物か調べたところ、黎明館で企画展が開催されていることを知り、連絡したのだという。数枚のはがきの内の一枚を紹介する。



瀬尾南海筆

渡瀬左傳宛はがき

一二×七・四

画題は、麦踏みか

(個人蔵)

宛名は、渡瀬左傳という人物であった。渡瀬左傳の親戚(従兄弟)に富永能雄(函館ドック社長)がおり、南海と深く繋がりのあった人物である。

富永氏についての情報は、次のことになる。

富永能雄は、平戸市生月島の出身。富永家は、平戸藩の祐筆を務めていた。ハガキを保管していた渡瀬家は、平戸藩の医師である。渡瀬家と富永家は親戚関係にあり、渡瀬左傳は、富永能雄とは実の従兄弟であり、左傳の妻が能雄の姉という非常に近くしていた親類である。渡瀬家には多くの書画があり、その中にも南海の絵が含まれているという。

添えられたハガキ四枚のうち三枚は南海から左傳に送られたハガキで昭和二十四(一九四九年)、同三十(一九五五)年の年賀状等であった。

『南海画集』には、南海は、富永氏と同十二(一九三七)年に知り合い、同二十(一九四五)年、南海は富永氏と北海道に旅行をしている。その間、五月二十五日に空襲で永福町の自宅を全焼している。家は全焼し、残ったのは、留守番の長男が辛うじて持ち出した柳行李二つと、刀三振りであったという。

また、同二十一(一九四六)年十二月、富永氏の紹介で長崎へ旅行。佐世保郡喜重氏のもとに逗留。五島列島、生月島などを巡り、スケッチを多数。同三十三年、妻カネと共に長崎、鹿児島、雲仙、別府などを旅行している。



長崎県生月のあらかぶ

南海筆「あらかぶ」(まくり)

紙本・墨画着色 三四・五×五三・五

昭和二十一(一九四六)年

右の作品に「生月」と書いてあることは知っていたが、生月島と聞いて、「生月」とは、長崎県にある生月島ということに初めて繋がった。

## 2 宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館研究員の齊藤全人氏から連絡があったのは、企画展が始まって一月ほどたった頃であった。瀬尾南海がどのような人であるか、これまで詳細がわからなかったために、展示できずにいた作品を、黎明館の企画展で情報を得たこともあり、展示する計画であるという。そこで、展示予定の南海作品（左図）に使われている落款と印章から、いつ頃のものか制作された時期が特定できないかという問い合わせであった。

南海筆「木蓮に呷々鳥図」掛幅

絹本着色 一六六・五×八四・四

大正～昭和初期（二十世紀）

（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）



落款・印章



早速、当館にあるすべての作品の落款と印章を比較したが、同じ落款・印章は、一つも見つからなかった。考えられることの一つは、南海の作品は、空襲によって、戦前の作品の多くが失われているため、当館の作品は、時代空白の部分があり、その時代の作品なのではないか、ということである。つまり、南海が第十二回文展に出品入選してから後で、南海は、後に、画壇から離れていくことになるが、それ以前の時期（一九一八～一九三〇）の作品なのではないかと判断し、お答えした。展示図録の解説には、次のように記されている。

「白木蓮の花に覆われた明るい画面の中で、つがいのハッカチョウの漆黒の羽毛が一際映える。本図が貞明皇后のお手許にあった作品であることを考えると、吹上御苑で飼育されていたハッカチョウをモデルにした可能性も考えられる。」

いずれにしても、今後、他の南海作品の調査を待ちたい。

### 第五節 祖父鶴汀の資料新発見

企画展が開催されて一月ほど経過した頃、古美術に関する情報が入ってきた。祖父鶴汀の掛軸があるというものであった。これが、次頁の双幅である。これまで、鶴汀が描いた資料としては、前述した西郷隆盛を描いた一点しかわかっていない。もし、本物だとすれば、貴重な資料になると考えた。

しかし、鶴汀の資料は、一点しか残っていないとされ、比較する資料が限られているため、掛軸からの情報を読み解くことになった。

山下廣幸氏（黎明館専門委員）の評価意見書を参考に説明したい。

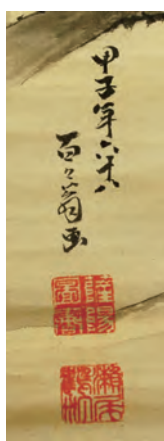
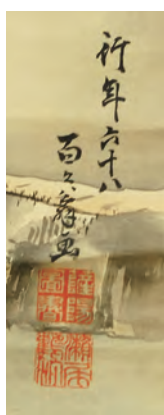
絹本に墨画淡彩で描かれた山水画と琴棋書画図の対幅。

落款は「行年六十八 百々翁」と記され、「薩摩図書」（白文方印）と「瀬尾鶴汀」（朱文方印）の二顆が押される。

瀬尾鶴汀筆「山水画と琴棋书画図対幅」

絹本・墨画淡彩 一〇五×四二

大正十三（一九二四）年



「琴棋书画図」は、遠景に楼閣風の建物と山岳、中景には瀑布や岩壁、近景に掛幅、囲碁・将棋を楽しむ高士、そして従者に琴を持たせて橋を渡る杖を持った高士が描かれる。

落款は「甲子年六十八 百々翁画」で、山水図と同じ印が押されている。この双幅は、印文の「薩摩図書」と「瀬尾鶴汀」によって、薩摩の瀬尾鶴汀という人物が、この作品を描いたことは事実として確認できる。そして、両者ともに狩野派の画風が良く表われたもので、鶴汀が狩野派の粉本によって描いたものと思われる。孫の南海が、狩野探溟に師事したことを考えても、鶴汀自身も狩野派の画風を身につけていたことは、十分に推察できる。

落款の年紀によって、甲子の年、鶴汀六十八歳の時の作品であることはわかるが、鶴汀の生没年が不明（長男行成氏が記した南海年譜では、大正三年没とあるが不詳。没年齢は不記）であるため、甲子の年が何年であるかは、決められない。しかし、作品の保存状態の古色などを考慮すると大正十三（一九二四）年の作と考えたい。

したがって、鶴汀の生年は、安政三（一八五六）年、没年は、大正十三（一九二四）年以降と考えられるが、生没については、今後のさらなる調査が必要である。また、これらのことから、鶴汀が島津斉彬の絵の相手をしたというような伝聞は、再度検討する必要がある。

今のところ生年、没年ともに明確でない部分があるが、この資料に記載された情報と、伝えられる内容から、今回の資料は、鶴汀に関する少ない貴重な資料である。



#### 四章 南海の眼差し

今回の企画展では、所有する南海作品を全て紹介するために、期間中二回の展示替えを行った。全ての作品を展示してじっくり見ると、南海のものを見つめる、鋭く、厳しく、優しい眼差しを感じるようになった。特に猫を作品について、わかったことなどをまとめてみたい。

南海筆「閑」<sup>のどか</sup>掛幅

絹本着色・一一九、八×三五、七

昭和二十五（一九五〇）年



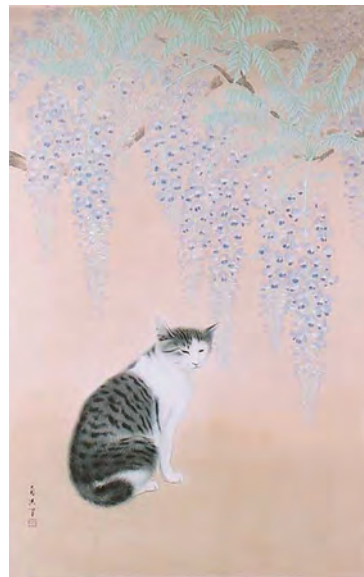
右は、リーフレットの表紙に使用した資料である。猫のゆったりとした感じと、縦長の画面にゆっくりと渦巻くように描かれた、南瓜と空白の間の具合が、見る人を和ませるように感じたので、この資料を選んだ。

ここに描かれているのは、南瓜、南瓜の花、猫。若い雄猫で寝ているように見えて、実は耳をそば立て、警戒しながら寝たふりをしているように見える。実の詰まった夏の南瓜や勢いのある蔓と上に伸びる構図は、現代的で猫の元気を強調するかのようである。

南海筆「長閑」<sup>のどか</sup>額

絹本着色・一〇三、五×七三

昭和三十一（一九五六）年



右は、藤棚の下に一匹の猫。この藤棚は、南海邸（今は長男行成邸）の庭にあり、毎年風情のある姿を見せてくれたそうである。この猫は、年を重ねた雌猫で、日本画の世界を作り出す藤の花と、年輪を重ねた猫の落ち着きが、画面に静かで落ち着いた雰囲気醸し出している。こうなると、藤の花の前で気品を放つモデルのようでもある。いずれも、猫好きの南海が可愛がったのだという。

#### おわりに

今回の企画展開催にまつわることを、まとめてきたが、今後も南海や鶴汀の資料が、発見されることもあるのではないかと思う。この企画展がその一助になれば幸いである。

また、今回の企画展を前にして南海の長男行成氏が他界された。悲しい知らせであった。行成氏には、展示を始める半月ほど前に開催の御案内を送付していた。

十二月二十三日初日を迎え、年が明けて、三男行弘氏からそのことを聞いた。亡くなったのは、企画展が始まる直前の十二月十五日のことであったという。その後、行成氏の奥様（敏子氏）からも手紙が届いた。企画展の開催を楽しみにしていたとのことで、残念でならない。手紙には、「行成氏が、父南海とともに、空から展覧会の模様を嬉しそうに見つめているに違いない。」との言葉が添えられていた。

その後、三月二十八、二十九日には、敏子様御家族が来館した。企画展の残り一週間という時期で、展示を御覧になり、喜んでいただき、安心した。

#### 【謝辞】

企画展開催に当たり、多くの方々にお世話になった。改めて感謝申し上げます。

#### 主な参考文献

『瀬尾南海画集』（有限会社形文社、一九九六年）

『大日本書畫名家大鑑 傳記下編』（第一書房第一書房、昭和五十年）

『鳥の楽園―多彩多様な美の表現』（三の丸尚蔵館展覧会図録No.68、二〇一五年）

（きりはら はやと 本館学芸専門員）